

避妊雌猫の会陰ヘルニアにおいて内閉鎖筋転移術によりヘルニア

孔の閉鎖を行った一症例

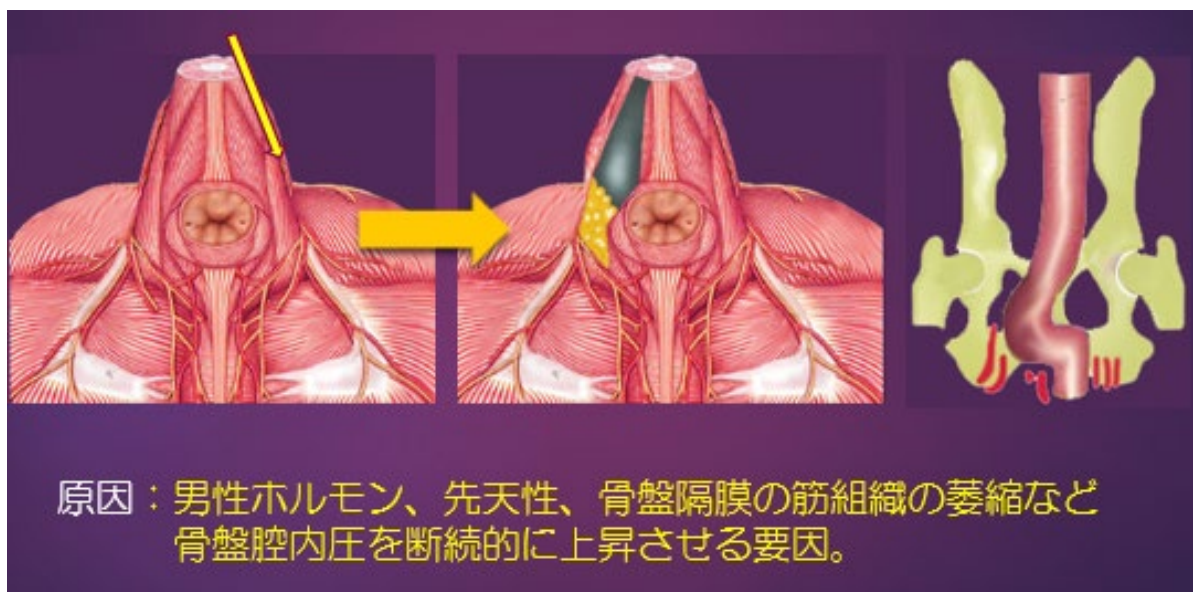
新里 健¹⁾

1) 赤瓦動物病院 沖縄県

【はじめに】

会陰ヘルニアは、会陰部の筋肉が分離して骨盤の隔壁である筋肉が直腸壁を支持することができない場合発生し、多くの場合、直腸の変位に起因した排便障害を引き起こします(図 1)。骨盤隔膜が脆弱する原因は男性ホルモンの関与、先天性、後天性の筋力低下や萎縮によると考えられています。会陰ヘルニアは犬では一般的で、M,ダックス、ウェルシュコーギー、シベリアンハスキー、ボストンテリアなどの犬種に多いとされていますが、その他の犬種でも一般的に認められます。そのほとんどは去勢されていない雄犬に発生します。猫の場合、去勢された雄に多く発生し両側性に発生しやすい傾向にありますが、発生そのものが稀です。避妊された雌猫での発生はさらに稀で手術方法について検討された報告も少ないようです。今回、避妊雌猫に発生した会陰ヘルニアにおいて内閉鎖筋転移術を行い良好な結果が得られたため、その治療経過を報告します。

図 1



【症例】

3 才、避妊雌、エキゾチックショートヘア、混合ワクチン接種済み。1 年前に心室中隔型の肥大型心筋症と診断されています。

【主訴】

症例は排便困難、肛門周囲の痒み、肛門からの出血を主訴に来院しました。

【身体検査】

視診にて左右会陰部の左右の会陰部の膨隆(左>右)、直腸検査にて直腸の左側への拡張と蛇行、便貯留を触知しました。

[手術および治療経過]

手術は肥大型心筋症の既往歴があることから手術時間の短縮と術後侵襲によるストレスを緩和するため、また右側は直腸変位を認めずヘルニア孔が比較的軽度であったことから、左側のみの手術を実施しました。右側は術後経過をみながら手術の必要性について再度検討することとしました。

伏臥位で尾を挙上して保定を行い肛門巾着縫合を行い肛門の閉鎖を行いました。その後、肛門よりやや左側を尾根部から坐骨結節まで縦切開を行い会陰部ヘルニア孔の確認を行いました(写真 1)。孔内に少量の液体貯留と逸脱した脂肪組織を確認しました。脂肪組織を剥離分離後、発達した内閉鎖筋の付着部を閉鎖動静脈や神経の損傷に注意しながら坐骨骨膜を剥ぐようにメス刃にて閉鎖孔付近まで切開剥離し、背側へ牽引しました(写真 2,3)。内閉鎖筋は 3-0 ナイロン糸を用いて内側を外肛門括約筋、背外側を肛門周囲の筋群と単純結紮縫合を行いヘルニア孔の閉鎖を行いました(写真 4)。現在、術後半年ほど経過するが再発はなく排便障害も改善されています。

[考察]

比較的良好に遭遇する犬の会陰ヘルニアの手術は肛門周囲の筋肉が萎縮している場合においても、仙結節靭帯を外肛門括約筋と縫合する手法によってほとんどの症例で強固なヘルニア孔の閉鎖が可能で(図 2)。しかしながら猫の場合、この仙結節靭帯がそもそも存在しないため肛門外側の筋群の牽引は筋繊維の裂開により再発の危険性があります。今回の症例では内閉鎖筋が十分に発達していたために内閉鎖筋転移によるヘルニア孔の閉鎖が可能でした。内閉鎖筋の発達は猫という動物種によるものか、若齢のためなのか症例数が少ないために明確に比較判断することはできませんが、内閉鎖筋転移術は猫の会陰ヘルニア整復を行う際の有用な手法になり得る可能性があると思われるました。

写真 1

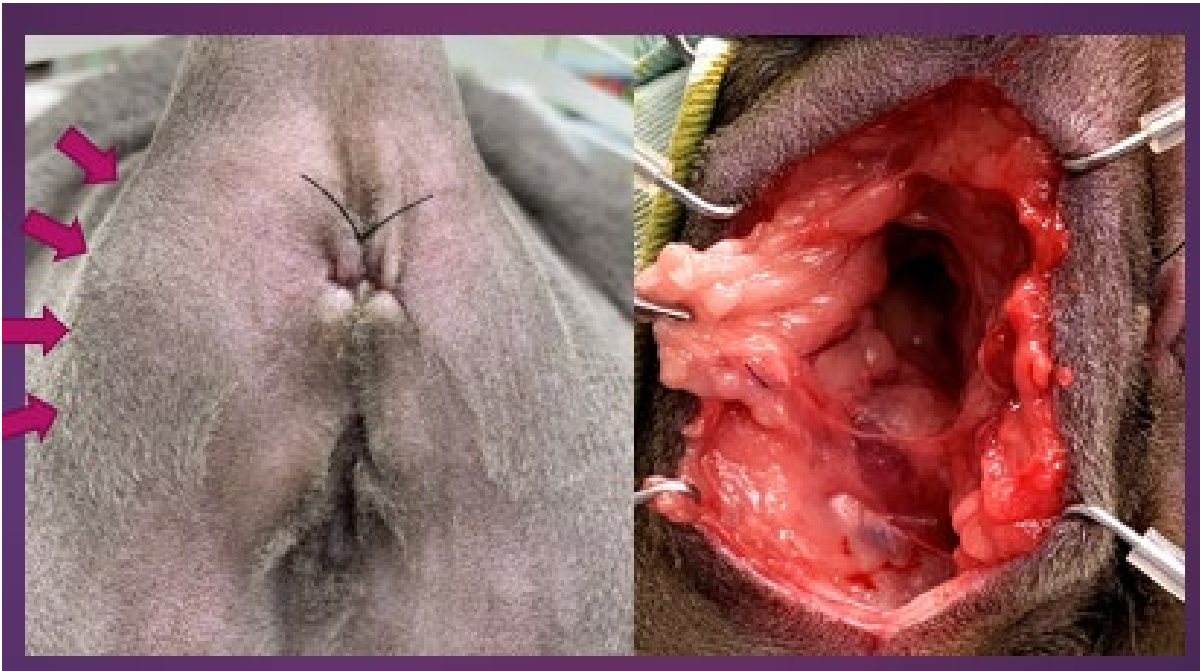


写真2

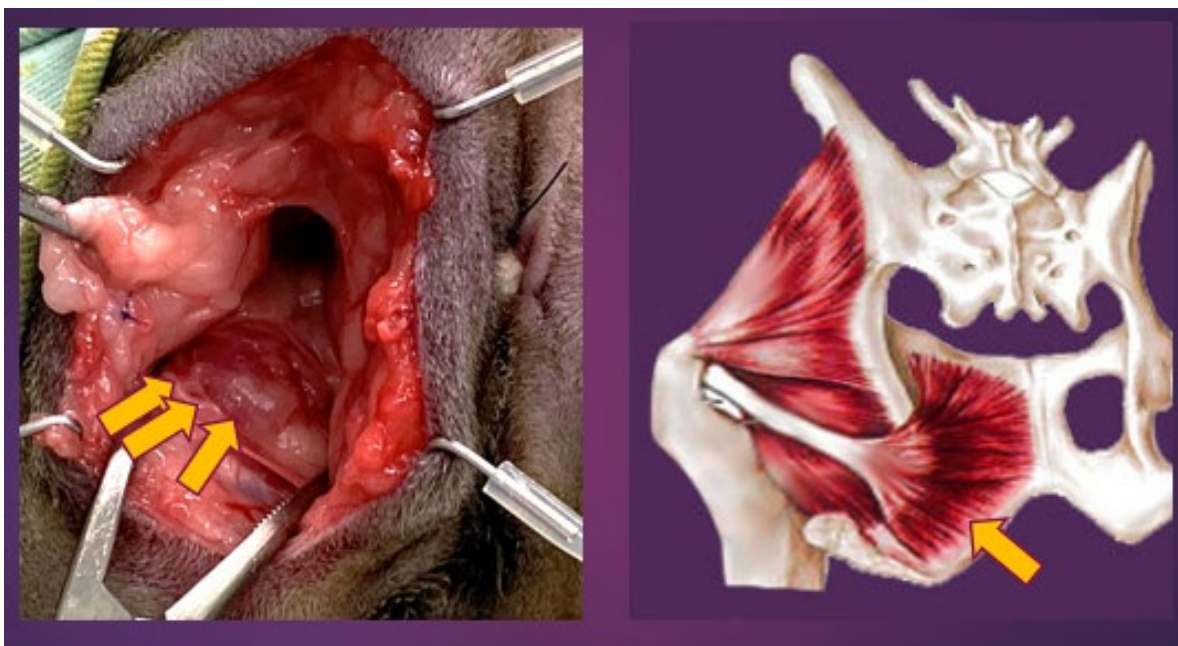


写真3

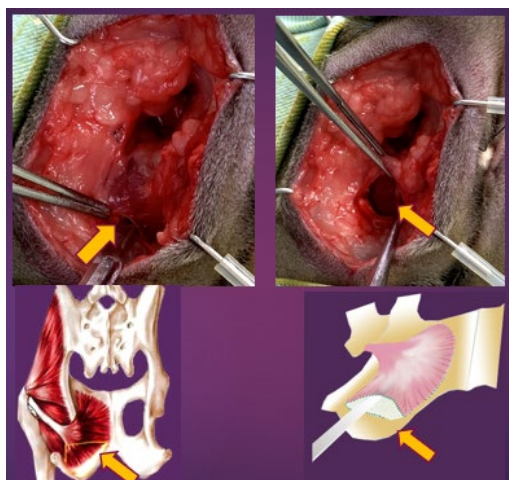


写真4

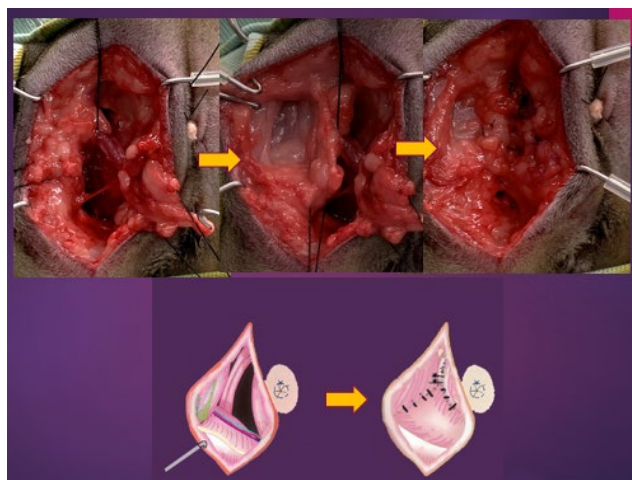


図2

